

祥まゆ美

「大きな樹の下」

ピクニックは突然終わった

母は私を

江戸川を見下ろせる里見公園の

大木の根もとに座らせた

ちよつと待って

それから

母は帰って来なかった

泣かずに待っている

夕やみの中からひよっこり

久しぶりに見る父の顔が

私に近づいて ため息をついていた

永遠に待つことが出来るのだろうか

何を：待つのだろうか

日常が戻ってからも

私の中心にはいつも

待つ子どもが生きていた

何度も私は

あの大きな樹まで

一人で歩いて行って

日ぐれまで座っていた

もう誰も迎えに来ない年になっても

木もれ陽のさざめきの中

ザラザラの木肌にほつぺたを押しあてた

何ともいいがたい静かな気持ち

その木へ私をいざなう

私のふるさとは

私の母は

あの大きな樹

名まえも知らない落葉樹

ずっと 永遠に